

ノ
ー
・
モ
ア
・
パ
レ
ー
ズ

二つのもののためにわが心は憂う
貧しさに苦しむいくさびと
軽べつさるるさととき人

『アポクリファ 旧約聖書外典』

「ベンシラの知恵」第26章28節

パレーズ・エンド² ノー・モア・パレーズ * 目次

主要人物一覧 vii

第一次大戦当時の英国陸軍の階級と登場人物 x

第一部 1

第二部 141

第三部 249

訳者あとがき 347

訳注 371

主要人物一覧

クリストファー・ティージェンス

ルーアンの基地で大尉を務める。元は帝国統計局に勤めていたが、第一次大戦が始まると、英仏の単一指揮を支持し、上層部と対立、局を辞職し軍人となった。浮気者の妻シルヴィアとも別れ、故国にいる恋人ヴァレンタイン・ワノップに思いを馳せる。

シルヴィア・ティージェンス

クリストファーの妻であるが、何かにつけて夫を苦しめる。クリストファーがヴァレンタインをルーアンで囲っているのではないかと邪推し、かつての浮気相手ペローン少佐を利用しフランスにいる夫のもとに押しかけていく。

エドワード・キャンピオン

ルーアンの基地の最高司令官を務める職業軍人で、位は少将。亡くなったクリストファーの父の親友で、クリストファーの名付け親。

カウリー特務曹長

クリストファーの右腕となつて働く中年の軍曹。ロンドン西部のアイルズワースに妻と娘がいる。軽い発作を起こして意識を失うことがあり、将校になることを希望。少尉へ

の任官を果たす。

09 モーガン

ティージェンスの部下の兵卒で走り使いをしているが、補給廠からの帰りに榴散弾に当たり、小屋にたどり着くや、クリストファーの腕のなかで、血だらけの姿で、息絶える。その姿は以降、ティージェンスの脳裏に強迫観念となって蘇る。

マッケクニー（マッケンジー）大尉

空襲の騒音に耐えられず発狂する、キャンピオン將軍がティージェンスに面倒を見るように押しつけてきた人物。クリストファーの親友であったヴェインセント・マクマスターの姉の子であることが後に分かる。

ペローン少佐

シルヴィアのかつての浮気相手。フランスに派遣されていたが、国王への書簡を携えて英国に戻ったところをシルヴィアに利用され、彼女のルーアン行きを手伝う。シルヴィアにホテルの部屋の鍵を開けておくように懇願し、夜中に忍んでいくことで大騒動のきっかけをつくる。

レヴィン大佐

キャンピオン将軍に仕える参謀将校。フランス貴族の娘ミス・ベイリーと婚約中で、フランス語が堪能なクリストファーに彼女との仲介役を頼んでいる。

オハラ将軍

ルーアンの基地での憲兵司令官。自治領カナダの兵の取り扱いなどでクリストファーと対立。シルヴィアを巡る騒動でクリストファーを職務停止処分にする。

ホチキス少尉

新聞社主のバイチャンの肝入りで軍馬を鍛えるためにルーアンの基地に送られてきた獣医師。

第一次大戦当時の英国陸軍の階級と登場人物（初出頁）

士官 (Officers)

元帥 (Field Marshal)

大将 (General)

中将 (Lieutenant-General)

少将 (Major-General) エドワード・キャンピオン (9)、オハラ (136)

大佐 (Colonel) ショニンソン (47)、レヴィン (52)、ギラム (133)

中佐 (Lieutenant-Colonel)

少佐 (Major) コーンワリス (40)、ジェラルド・ドレイク (89)、ペローン (89)、

ロレンス (130)、ハルケット (130)、サーストン (163)

大尉 (Captain) マッケクニー (マッケンジー) (5)、クリストファー・ティージェ

ンス (8)、ブレンティス (33)

中尉 (Lieutenant) ションス (33)

少尉 (Second Lieutenant, Subaltern) ホチキス (ヒッチコック、イッチコック) (35)、

ピトキンズ (107)

その他の階級 (Other Ranks)

一等准尉 (Warrant Officer Class 1)

二等准尉 (Warrant Officer Class 2)

特務曹長 (Sergeant Major) カウリー (9)、ルドウー (35) (両者とも後に少尉に昇進)

軍曹 (Sergeant) モーガン軍旗軍曹 (37)、デイヴィス (135)、ケース調理担当軍曹 (344)

伍長 (Corporal)

兵長 (Lance Corporal) トレンチ (37)、ガーティン (72*・123)、カルデイコット (127)、ペリー (220)

兵卒 (private) O9モーガン (6)、17トマス (32)、ローガン (46)、トマス・ジョンソン (51)

*斜体は文中ではじめて言及されている個所

第一部

I 章

なかに入ると、その空間は散漫で、直方形で、冬の夜の滴りの後で暖かく、茶色がかったオレ
ンジの光の塵で充たされていた。形は子供が描く家のようだった。二人ずつ三組に分かれた男た
ちの真鍮色の斑点ができた褐色の手足は、白熱光を発するコークスが詰められ、円錐形の薄鉄板
に覆われた、穴の開いたバケツから漏れる光にぼんやりと照らされていた。低い階層に属するら
しい二人の男は、火鉢の脇の床の上にしゃがみこんでいた。小屋の両端に二人ずついる四人はま
ったく無関心な態度でテーブルにうつ伏していた。真つ暗な平行四辺形の戸口の上の軒からは、
溜まった湿気が、いくらかの間隔を置いてではあるが、しつこくも止むことなく、ガラス製の楽
器のような音を立てて滴り落ちていた。火鉢の上に身をかがめた二人の男たち——坑夫たちだっ
た——が歌うような方言を使い、ほとんど聞き取れない声で話し始めた。それはいつまでも活気
なく単調に続いた。一方が他方に長い、長い物語を語り、聞き手は動物的なうなり声をあげなが
ら、理解と同情を示しているように見えた。

地平線の黒い円を満たしていた威厳ある茶盆の音が、地面に向かって轟いた。何枚もの薄鉄板
がガチャガチャ、ガチャガチャと音を立てた。少し経つと、小屋の粘土の床が揺れ、鼓膜が内に

圧せられ、硬い音が宙に降り注ぎ、巨大なこだまが男たちを押しひしひしいだ——右へ、左へ、あるいはテーブルの方に突つ伏させた。そして、巨大な下生えを舐める炎のカチカチいう音が、その夜の定められた状況になった。床の上の二人の男たちの一人の唇は、頭が火鉢に被さるにつれ、信じがたいほどに赤く膨らみ、話しに話し続けた。

床の上の二人の男はウエールズ人の坑夫だった。そのうちの一人はロンザ溪谷¹出身で、独身だった。ポンスターデュレー²出身のもう一人の男は、洗濯屋をやっている妻がいて、開戦の直前に地下に潜るのを止めていた。戸口から右にあるテーブルに就いている二人の男は、特務曹長だった。一人はサフォーク³の出身で、もう一方より連隊の軍曹を務めた経験が十六年長く、経験豊かな男だった。もう一方の男は、英国系カナダ人だった。小屋の反対側にいる二人の将校は大尉で、一方はスコットランドで生まれオクスフォード大学で教育を受けた若い正規将校だった。ほとんど中年で太っているもう一方の将校は、ヨークシャーの出身で、民兵大隊に所属していた。床の上の兵卒の一人は激しい怒りに駆られていた。というのも、なぜ洗濯屋を売った妻が購入者からまだ代金を受け取っていないのか帰宅して調べる許可を年長の将校に拒否されたからだだった。もう一方の兵卒は牝牛のことを考えていた。ケアフィリ⁴近郊の山の農場で働く恋人が、奇妙な牝牛について手紙に書いてよこしたからだだった。白黒斑のホルスタイン——確かに奇妙な牛だ。イングランド人の特務曹長は遅延を強いられた派兵について、涙を流さんばかりに心配していた。彼らを行軍させ終えるには夜中の十二時になってしまうだろう。兵士たちはぐずぐずと待たされるのを好まない。彼らは不満を募らせる。彼らはそれを好まない。彼にはなぜ兵站部の補給係将校がフード付きランプの口ウソクの在庫を揃えておくことができないのか訳がわからなかった。兵士

たちにぐずぐずと待機せよと命ずるわけにはいかない。やがて夜食をとらせる必要がある。補給係將校はそれを好まないだろう。不平が口をつけて出てくるのも当然だった。夕食の発注が必要だった。勘定書を振り出すのが当然だった。一人前一ペニー半の夜食、二千九百三十四人分。それでも真夜中まで兵士たちをブラブラさせておくのは適切ではない。それは彼らを不満にする。可哀想に、初めて前線に出ていくというのに。

カナダ人の特務曹長は豚革の手帳のことを心配していた。彼は町の軍需品補給所でそれを買ったのだ。それを演習の際に取り出して、何らかの報告書を副官に読み上げるところを想像していた。直立し背を伸ばせば、演習でとても格好良く見えるだろう。しかし、彼はそれを雑囊のなかに入れたかどうか思い出せなかった。身に付けてはいなかった。胸の右ポケット、左ポケット、裾の右ポケット、左ポケット、椅子から手の届く釘に掛けてある外套のすべてのポケットを探してみた。従卒として働いている男が手帳を雑囊のなかに詰め込んだと断言したにもかかわらず、彼は本当にそうだったか確信がもてなかった。ひどく困ったことだった。オンタリオ⁵で買った今の札入れは膨れ上がり裂けていた。帝国將校が報告について何か訊ねたとき、それを取り出すのは体裁が悪かった。カナダ軍について誤った印象を与えてしまうだろう。ひどく困ったことだった。彼は競売人だった。このペースだと分遣隊を駆まで送り、列車に乗せたら午前一時半になってしまうということに關しては彼も同意見だった。それでも、あの手帳が雑囊に詰め込まれたのかどうか不確かなのはひどく困ったことだった。彼は自分が演習で直立し背を伸ばし、何かの報告について副官が数字を訊ねたとき、手帳を取り出し、良い印象を与えるところを想像した。今はフランスにいるのだから、副官たちが帝国將校であることを彼は理解していた。ひどく困った

ことだった。

途轍もないドカンという爆発音が、それぞれの男に、さらに男たち一団に、耐え難いほど親密な事どもを語りかけた。この断末魔の嘔吐の後では、他のすべての音が沈黙の奔流と化したみたいで、血の流れさえ聞こえる耳に苦痛をもたらした。若い方の将校が荒々しく立ち上がり、釘にかかった捻じれたベルトを掴んだ。年長の将校はテーブルを回って歩いて行き、手で下を指した。彼は先任の若い将校が氣も狂わんばかりになっていることに気づいていた。若い将校はひどく疲れ、相手に向かって、きつい、傷つけるような、聞き取れない言葉を発した。年長の将校もまた、きつい短い言葉を発したが、こちらもまた聞き取れなかった。年長の将校はテーブルの上に手を伸ばし、下を指さした。年上の特務曹長は年下の特務曹長に向かって、マッケンジー大尉がまた狂気の発作を起こしたと言ったが、こちらも聞き取れないほどの声で、自分でもそのことを承知していた。年上の特務曹長は、二千九百三十四人の乳飲み子に同情する母親的な心のなかに、将校に対しても母親的な役割を演じる気持ち湧き上がるのを感じていた。彼はカナダ人の特務曹長に、一時的に氣がおかしくなっているマッケンジー大尉は英国陸軍のなかで最高の将校だと訴えた。自分自身を蔑んでいるのですよ。英国陸軍最高の将校なのに。これ以上の将校などいないのに。注意深く、スマートで、英雄のように勇敢なのに。前線の部下を氣遣っている。信じられないくらいに：年長の特務曹長は、将校に母親みたいに接するのは疲れることだとほんやりと思つた。氣が触れた兵長や若い軍曹に対してなら、ゼーゼー息を切らしながら意見することもできる。だが、将校ともなれば、氣を遣つてものを言わなければならぬ。難しいところだ。幸いなことに、もう一方の将校は信頼のおける冷静な人物だった。年をとって善良な、と諺に言わ

れているような。

あたりが完全に静まり返った。

「くそ、逃がしやがったな」ロンザ出身の伝令兵が驚くほどの声を上げた。強烈な閃光が小屋から見える破風の上で明滅した。

「訳がわからん」ポンターデュレー出身の相棒が生まれつきの歌うような声で哀れっぽく言った。「なんであのくそいま、いましい探照灯は俺たちを照らし出すんだ。ドイツ機によく見えるようにするためか。ああ、またマンブルズの丘の上にある俺の小屋を見たいものだ。生きて帰れたならな」

「そう悪態をつくな、O9モーガン」と特務曹長が言った。

「なあ、ダイ・モーガン、聞いてくれ」O9モーガンの相棒が話を続けた。「とにかく奇妙な牛だったに違いない。白黒斑のホルスタインだっというんだからな」

若い方の将校は会話を聞くのをやめてしまっていたみたいだった。テーブルを覆っている毛布に両手をつけて叫んだ。

「俺に命令するとは何様のつもりだ。俺は上官だぞ。いったい、ああ、くそっ、いったい全体：誰にであれ、命令などされてたまるものか！」その声は胸の奥で弱々しく崩れ去った。鼻孔が異常なほどに膨らみ、中に入る空気の冷たさを覚えた。自分に対する陰謀があたりに渦巻いているように感じた。そこで大声をあげた。「おまえと売春宿のあるじの將軍だな！」もっている鋭利な刃物で、ある種の人たちの喉を切り裂きたいと切望した。そうすれば胸のつかえが取れるだろう。テーブルの向かいで重そうに動いている大きな男の「座るんだ」という言葉が彼の四肢を麻

痺させた。彼は信じがたいほどの憎しみを覚えた。もし手を動かして短剣を握めたなら……

〇九 モーガンが言った。

「俺の洗濯屋を買ったいまいましい男の名はウイリアムズって言うんだ……もしカステル・コッホのエヴァンズ・ウイリアムズだったなら、俺はここから脱走するぞ」

「子牛を忌み嫌ったんだ」ロンザ出身の男が言った。「いいか、まず、俺の話を聞いてくれ……」二人とも将校たちの会話は聞いていなかった。将校たちの話はまったく彼らの関心の埒外だった。子牛を忌み嫌うとはいったい何が母牛にとりついたんだ。ケアフィリの裏手の山々の上で。秋の朝には丘の中腹全体が蜘蛛の巣で覆われる。陽を浴びてガラス製の糸みたいに煌めく。牝牛は邪眼に睨まれたのに違いなかった。

テーブルに突っ伏した若い大尉は相対的な序列順位について長い議論を始めた。非常な早口で甲乙両側からの議論を展開した。自分はゲールヴェルトの戦い⑤の後で官報に昇任を公示された。相手は、その一年後だった。確かに後者は連隊本部の常任指揮官で、自分は配給と訓練だけの部署に属していた。だからといって「座るんだ」といった命令を受けるいわれはなかった。彼はますます早口になって、円について話した。原子の崩壊によって円周が完全になるとき、世界は終わりを迎えるだろう。至福千年には命令を出すことも受けることもなくなるだろう。もちろん、それまでは自分も命令に従わなければならなかった。

年長の将校は、役立たずの准大尉たちが常に入れ替わる寄せ集めの司令部、皆働きたがらない下士官たち、ほとんど皆が植民地出身か物資なしに働くのに慣れていない兵卒たち、物資はすべ

† 著者

フォード・マドックス・フォード (Ford Madox Ford)

1873年生まれ。父親はドイツ出身の音楽学者 Francis Hueffer、母方の祖父は著名な画家 Ford Madox Brown。名は、もともとは Ford Hermann Hueffer だったが、1919年に Ford Madox Ford と改名。

多作家で、初期にはポーランド出身の Joseph Conrad とも合作した。代表作に *The Good Soldier* (1915)、*Parade's End* として知られる第一次大戦とイギリスを取り扱った四部作 (1924-8)、1929年の世界大恐慌を背景とした *The Rash Act* (1933) などがある。また、文芸雑誌 *English Review* および *Transatlantic Review* の編集者として、D.H. Lawrence や James Joyce を発掘し、モダニズムの中心的存在となった。晩年はフランスのプロヴァンス地方やアメリカ合衆国で暮らし、1939年フランスの Deauville で没した。

† 訳者

高津 昌宏 (たかつ・まさひろ)

1958年、千葉県生まれ。慶應義塾大学文学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科前期課程修了、慶應義塾大学文学研究科博士課程満期退学。現在、北里大学一般教育部教授。訳書に、フォード・マドックス・フォード『為さざる者あり』(パレーズ・エンド①、論創社、2016)、『五番目の王妃 いかにして宮廷に來りしか』(同、2011)、『王璽尚書 最後の賭け』(同、2012)、『五番目の王妃 戴冠』(同、2013)、ジョン・ベイリー『愛のキャラクター』(監・訳、南雲堂フェニックス、2000)、ジョン・ベイリー『赤い帽子 フェルメールの絵をめぐるファンタジー』(南雲堂フェニックス、2007)、論文に「現代の吟遊詩人——フォード・マドックス・フォード『立派な軍人』の語りについて」(『二十世紀英文学再評価』、20世紀英文学研究会編、金星堂、2003) などがある。

パレーズ・エンド② ノー・モア・パレーズ

2018年4月10日 初版第1刷印刷

2018年4月20日 初版第1刷発行

著者 フォード・マドックス・フォード

訳者 高津昌宏

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1683-8 ©2018 Printed in Japan